

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：32620

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530721

研究課題名(和文) 成人期女性の過去から現在の対人的経験の認知に関する縦断的検討

研究課題名(英文) Longitudinal study of cognition of interpersonal experiences from past to present in adult women

研究代表者

山岸 明子 (Yamagishi, Akiko)

順天堂大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：40220248

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)： 青年期から成人期にかけて対人的枠組み(IWM)や対人的経験の認知に関する17～19年にわたる縦断的検討を行い、質問紙・生育史・面接調査のデータを用いて量的・質的な検討を行った。その結果、1)2時期の得点にはある程度の安定性があること、2)IWM得点の上昇に關与する要因として夫との関係が大きいこと、3)成人期の適応や仕事への取り組みに關して、成人期の対人的要因や状況要因の他に17～19年前に測定された青年期の対人的要因も關与していること、4)成人期の経験によって以前のIWMや母親との関係が大きく変わる場合があることが示された。

研究成果の概要(英文)： We have carried out 17 or 19 years longitudinal studies around interpersonal framework (IWM) and cognition of interpersonal experiences using questionnaire, life history, and interview method. It was showed that 1) there were some stability between scores of two times, 2) good relationship with the husband influenced to increase of IWM scores, 3) the adaptation or efforts at their work in adulthood were affected not only by interpersonal and situational factors in adulthood but also by variables in adolescence measured 17 or 19 years earlier, and that 4) there were some cases that changed fairly their IWM scores or relationship to their mothers by experiences in adulthood.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：縦断的研究 対人的枠組み 適応 成人期 青年期 母親との関係

## 1. 研究開始当初の背景

発達心理学において縦断的研究がもつ意義は大きい、実施上のむずかしさから縦断的研究によらずに横断的研究や retrospective なデータに基づいて「発達的变化」とされることも多い。しかし世界的に見れば大規模な縦断的研究も行われてきており、貴重な知見が報告されている。例えば Grossman & Grossman 編(2005)では着衣に関する9つの縦断的研究がまとめられている。しかし研究の蓄積は少なく、取り上げられる側面も限られているし、幼少期から青年期までがほとんどで、成人期にまでわたるものはきわめて少ない。

応募者はここ10数年、青年期から成人期初期にかけて対人的経験の認知に関する縦断的研究を行い、様々な観点から検討を重ねてきた(山岸,2006他)。被調査者の数は多くなく、女性で且研究開始時に看護学生という特定のサンプルであるが、対人的枠組みと過去から現在にかけての対人的経験の認知に関して、質問紙調査を中心に既に長いものでは11年間(4時点)にわたっている。また質問紙法によるデータ収集だけでなく、学生時代、更に7年後にも生育史を記述してもらったり、11年後には面接調査も実施して、現在の状況だけでなく、生育の過程や縦断的研究を行ってきた時期について retrospective に語ってもらったりしてきた。

そして各時点での対人的枠組み(内的作業モデル(IWM))やそれとの関連が予測される過去から現在にかけての対人的経験の認知に関する様々なデータを得て、青年期から成人期初期のIWMや母親認知が発達と共にどう変わるのか、変わらないのか-連続性と変動性について縦断的な検討を行ってきた。

## 2. 研究の目的

1. で述べた様に、10数年にわたり青年期から成人期初期にかけて、対人的経験の認知に関する縦断的研究を継続的に行ってきたが、その被調査者が30代後半から40代前半になっている。彼女たちは職業人(看護職)として活躍したり、あるいは家庭に入り子育てに従事する等様々な人生を送っているが、成人女性・職業人・母親としての経験を積む中で今まで検討してきたことが更にどう変化するのかしないのか、青年期から成人期のあり方の安定性と変動性について縦断的な検討を行う。変化の要因として成人期という時期に共通する変化と、個人特有のものがあると考えられるが、そこに関与している要因は何か、どのような者が何によってどのように変化するのかを質問紙と面接調査のデータを用いて量的・質的に分析する。

また成人期の適応についての指標を増やして、青年期のあり方が成人期の適応を規定する程度、そこに働く要因、どのような経験が関与しているのかを明らかにする。更に今

までの調査で特徴があった者がその後どうなったかについても検討する。

## 3. 研究の方法

【被調査者】看護系の専門学校あるいは短大3年時に生育史の記述と質問紙調査に回答した者(第1グループは質問紙調査は翌年)の内、連絡がとれた者に質問紙調査の依頼をし、回答時に面接調査の依頼を行った。2グループの予定だったが、補足的に第3グループを加えた。

1) 1990年度卒業生(1990年生育史、1991年-1995年に質問紙調査実施) - 19名(内1991年のデータがある者15名、面接は11名(9名))

2) 1994年度卒業生(1994-1996-2001-2005に調査実施) - 40名、面接は19名

3) 1995年度卒業生(1995-1997に調査実施) - 22名、面接は施行せず。

年齢は(以下1)2)3)順に)40~42/37~39/38~40才。有職者はほとんどが看護職(看護師が多く(一部はパート職)、保健師・助産師・看護教員・養護教諭が各1から数名)、専業主婦3/6/2名。既婚者13/27/20名、子どもがいる者13/24/18名。

【調査時期】1)2010年6~8月2)2011年6~9月3)2013年1~2月

【質問紙調査】今までの調査と同じ項目と新たに付け加えた項目から成る。1)IWM尺度(詫摩・戸田)18項目2)対人的態度を見るものとしてエゴグラム(NP、A)20項目3)両親の養育態度15項目4)過去から現在の9時期の全体的適応感5)時間的展望尺度(白井)13項目6)レジリエンス尺度-感情の統制・メタ認知・肯定的未来志向・首尾一貫感覚等(小塩他)29項目7)現在の満足度-家庭や仕事等9項目8)自分にとって重要だったことに関する自由記述9)円環母子画-幼児期・短大時代・現在(第1グループはなし)、6)7)9)は新規に実施。6)7)は5)と共に現在の適応の指標として付け加えた。

【面接調査】卒業後どのように過ごしてきたか、つらかったこと・大変だったこと、自分にとって重要だったこと、子育て・仕事の意味。生育の過程について、特に印象的だったこと、重要だった人。自分は変わったか、親に対する気持ちは変わったか。今気にかけていること、充実感を感じていること等、半構成的面接を行った。計40分~1時間程度。(なお第3グループは面接ができなかったため、生育過程および卒業後のことについて記述してもらい、また配偶者のIWM等についても回答してもらった。)

【得点化】今までの研究と同様IWM得点-Secure-(Ambivalent+Avoidant)/2を算出した。各尺度それぞれについて(新規項目は因子分析により項目を選択した上で)合計点もしくは平均点を算出した。

## 4. 研究成果

### 1) IWM得点他の安定性・変動性

今までも青年期から成人期初期にかけて安定性・変動性を検討してきたが、本研究では3グループに関して17~19年経った後の2時期の得点間の相関を分析した。その結果a)2時期の得点間の相関係数は比較的高い場合が多く、年数が増えても数値が大きく下がることはなかった。b)過去から現在の適応感も大きく変わる者は少なかった。c)IWM総点に関しては、ほとんど変わらない者と大きく変化する者の両方が見られた。

### 2) 2時期(青年期・成人期)のIWM得点のあり方と成人期の関連

1991年にも質問紙調査に答えた15名(第1グループ)に関して、1991年と2010年の2時期のIWM得点を使って4つの群・高得点群、上昇群、下降群、低得点群に分けて、成人期の特徴を検討した。その結果a)現在の適応に関する得点は高得点群と上昇群で高かったb)上昇群の者は夫とよい関係をもつ者が多く、また仕事よりも家族を大切とする傾向が見られたc)下降群は他群よりも夫の理解が得られないことや、仕事に対する熱意を述べる傾向が見られた。

第2グループでは40名のデータが得られたので、2時期の対人的要因と適応感との関連について量的な分析を行った。その結果a)成人期のIWM等と成人期の適応感の3つの指標との間にプラスの相関が見られたが、それだけでなく、b)青年期の対人的要因も成人期の適応と関連すること、時に相関の値が成人期を上回る場合もあることが示された。IWMはその後の適応に関与するとされているが、本研究では17年間という長い間隔を経ても、以前の対人的枠組みのあり方が適応に影響することが縦断データにより実証的に示された。更にc)重回帰分析でも、現在の時間的展望には現在のIWMが大きく寄与している一方、レジリエンスと生活満足度では青年期の要因の寄与の方が大きいことが示された。

1994年の調査に回答し2011年の質問紙と面接の両方に回答した第2グループの19名に関して、2時期のIWM得点から4つの群・高得点群、上昇群、下降群、低得点群に分け、一方で面接の語りから仕事に対するやりがい感(意味・重要性を感じている、自己効力感をもっている)が高いかどうかで2群に分類し、その関連について検討した。その結果、a)やりがい大群は青年期・成人期共にIWM得点が高い高得点群の者が多く、その他はやりがいのある仕事に出会えた者であった。b)やりがい小群は青年期にIWM得点が低かった者が多

く、その他はやりがいのある仕事につけない事情がある者であった。青年期のIWMが成人期の生き方(仕事への取り組み方)に影響していること、またそれだけでなく成人期の状況要因も関与していることが示された。

第2グループと第3グループの各19名/22名について、IWM得点から高群/中程度群/低群に分けて、母子画との関連を分析した。位置関係に関しては、幼少期は第2グループでは内包・内接が多く一体的なとらえ方が優勢なのに対し、第1グループでは交差・外接や分離型の方が多く、特に低群は分離型が多いという特徴が見られた。現在は分離のものが多かったが、第2グループでは低群の4名が外接型であり、現在のIWM得点が最低の3名が該当していた。IWM得点が低い者は母親と心理的に密着していることが示唆されている。グループ間で結果が大きく異なっており、振り返りの機会の違いによるのか等更に検討することが必要である。

(なお第3グループには試みに夫のIWMについての質問をつけ加えたが、2つの不安定群で大きく異なる結果が得られた。

### 3) 青年期に記述された生育史の良好さ・問題性と成人期のあり方との関連についての質的検討

今回面接をした者の内、1991年にも回答している者9名(第1グループ)に関して、青年期に書いた生育史から生育の過程が良好な者、いくらか問題がある者、より深刻な問題がある者の3つのグループに分類した。該当者は各3-3-3名であった。3群の面接プロトコルや2回の質問紙調査の結果を分析した。その結果a)生育過程が良好だった者が現在特に良好ということではなく、問題群も理解ある受容的な配偶者によってIWM得点が上昇した者も見られ、IWMや適応の連続性は必ずしも連続的ではない。但し意識的な認知は好転しても、行動や感情には影響が残る場合もある。b)成人期の対人的認知や適応を規定するものは、どのような人と会いどのようなかわりをもつか特に夫が重要であること(同性の少し年長者も)内省力が関与していることが示された。c)成人期の仕事への取り組みとの関連に関しては、良好群は充実感を持ち、小問題群は家庭の方が大事とし、問題群は仕事を生きる上での手段ととらえている者が多かった。

青年期に記述してもらった生育史において母親との関係に顕著な問題があった者及び良好な関係をもった時期がなかった者5名(第2グループ 山岸2000で分析)に

ついて、面接での母親に関する語りを分析した。2名は母親との関係が好転し、肯定的な関係になっていた(内1名は怪我をして介助してもらったことがきっかけ、もう1名は特にきっかけはない)。他の3名は関係の質はかわっているが、状況によって問題が生じたりしていた。生育の過程に顕著な問題があっても、17年間の様々な経験を通して大きく変わる場合もあることが示されている。

#### 4) 親との関係の変化

母親との関係については、青年期・青年期から30代前半について検討してきたが(山岸2000、2009)本研究では30代前半と今回の30代後半の比較を行った。その結果、30代前半よりも肯定的な認知が減少し、母親への批判が増えていた。それらをもたらしした要因として、子育ての経験が増したことが関与していることが伺えたが、その他自分の成長・父親との関係や姑を見てという記述も見られた。特に母親群で母親との関係性が弱くなる傾向が見られた。

父親との関係に関しては、母親に比べて肯定的に語られる割合がやや多く、否定的に語られる場合がやや少なかった。子あり群・既婚群の方が未婚群よりも肯定的であり、結婚子育ての経験が父親の再評価・親密性を生じさせていることが示唆された。(なお看護系ではない文系の卒業生(同年齢)7名に試みに面接調査をしたところ、文系は看護系の30代前半と似ていたが、子どもの年齢が5才くらい異なることとの関連が示唆された。)

#### 5) 以上の成果をまとめると、

青年期から成人期にかけて17~19年にわたる縦断的な検討を行い、質問紙及び面接調査のデータを用いて量的・質的に検討した結果、2時期の得点間の相関は比較的高くある程度の安定性があること、IWMに関して変化をしている者としていない者があり、得点の上昇に関与する要因として夫との関係が大きいこと、また成人期の仕事への取り組みや適応に関して成人期の要因の他に青年期の対人的要因が関与していること、また親との関係に関して共通の変化と個人による変化があることが示された。

17~19年間という長い間隔を経ても、以前の対人的枠組みのあり方が成人期の適応や仕事への取り組みに影響することや、成人期の経験によって以前のIWMや母親との関係が大きく変わる場合があることが示された。それらのことを長期間にわたる縦断データによって実証的に検討する研究は、国内外を問わずほとんどなされていない。本研究は被調査者は少ないものの、先駆的な研究であり、大きな意義があると考えられる。今後更に縦断的研究を続け、今回の結果が安定したものなのか、そして成人期の経験

を更に積む中でどう変化していくのか等検討することが必要と考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 雑誌論文](計6件)

山岸明子 成人期の適応に影響する青年期・成人期の対人的要因 - 17年後の縦断的データに基づく検討 順天堂スポーツ健康科学研究 査読有 5-2 2014(印刷中)

山岸明子 青年期に記述された生育史の良好さと成人期の適応との関連 - 内的作業モデルを手がかりにして - 青年心理学研究(査読有) 25-1, 2013 29-44.

Yamagishi, A. & Imori, S. The stability and changeability of internal working models and interpersonal cognition from late adolescence to early adulthood: An 11-year longitudinal study of nursing students. 医療看護研究(査読有) 9-2, 2013 18-26.

山岸明子 青年期から成人期の対人的枠組みと対人的認知 - 19年後の縦断的变化 - 順天堂スポーツ健康科学研究(査読有) 3-4 2012 209-218.

山岸明子 大学生のレジリエンスと両親への態度・認知との関連 性差に着目して 順天堂スポーツ健康科学研究, (査読有) 2-3, 2011 87-94.

山岸明子 「成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連、及びその規定要因」への小高氏・瀧日氏のコメントに対するリプライ 青年心理学研究(査読有) 23-1, 142011 104-108.

#### [学会発表](計15件)

山岸明子 成人期女性のIWMと本人が認知した配偶者のIWM 日本パーソナリティ学会第23回大会発表予定 2014

山岸明子 成人期女性の円環母子関係イメージ画の分析 - 内的作業モデルと関連させて - 日本発達心理学会第25回大会発表論文集 2014 393.

井森澄江・山岸明子 成人期女性の母親・父親との関係 - 30代後半看護短大、文系学部卒業生の面接調査の分析 - 日本発達心理学会第25回大会発表論文集 2014 411.

山岸明子 青年期の対人的要因は成人期の適応に影響するのか? - 17年後の縦断的データによる分析 - 日本教育心理学会第55回大会発表論文集 2013 368.

Yamagishi, A. Adolescence to adulthood longitudinal study of 17 years. Paper presented in European Conference on Developmental Psychology in Lausanne. 2013 303.

山岸明子 生育過程における母親との関

係の問題は成人期まで続くのか - 問題があった 5 事例の 17 年後 - 日本心理学会第 77 回大会発表論文集 2013.

山岸明子 成人期の適応に影響する青年期・成人期の対人的要因 - 17 年後の縦断的検討 - 日本パーソナリティ心理学会第 55 回大会発表論文集 2013 75.

山岸明子・井森澄江 青年期の IWM と成人期の仕事への取り組み - 17 年間の縦断的研究 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集 2013 310

井森澄江・山岸明子 成人期女性の仕事・家庭への取り組みと適応感 - 看護系短大卒業 17 年後の調査から 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集 2013 311.

山岸明子 青年期に記述された生育史における母親との関係と成人期の適応に関する縦断的検討 日本心理学会第 76 回大会発表論文集 2012 1029.

山岸明子・井森澄江 成人期女性の母親との関係 - 縦断的データによる 30 代前半と後半の比較 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集 2012 146

井森澄江・山岸明子 成人期女性の父親との関係 - 母親との関係の比較から 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集 2012 147.

山岸明子 青年期から成人期の対人的枠組みと対人的認知 - 17 年後の縦断的变化 - 日本発達心理学会 2012 116.

山岸明子 成人期女性の対人的枠組みの変化と関連する要因 - 19 年後の縦断的变化 - 日本教育心理学会第 53 回大会発表論文集 2011 217.

山岸明子 青年期から成人期の対人的枠組みと対人的認知 - 19 年後の縦断的变化 - 日本発達心理学会第 22 回大会発表論文集 2011 538.

[図書](計 2 件)

Yamagishi,A.& Imori,S. Adolescence to adulthood longitudinal study of 17 years : Relationship between internal working models and attitude to one's occupation. Proceedings of European Conference on Developmental Psychology. Medimond Company. 2014 (in press)

山岸明子 こころの旅 - 発達心理学入門 新曜社 2011.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山岸 明子 (YAMAGISHI Akiko)  
順天堂大学・スポーツ健康科学部・教授  
研究者番号：40220248

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者

井森澄江 (IMORI Sumie)  
東京家政大学・人文学部・教授  
研究者番号：30143332